

髪がつなぐ思いやり

埼玉県 行田市立長野中学校 1年

関根 悠里（せきね ゆうり）

写真の中の子には、髪の色もまゆもなかった。小学三年の私には、
「何か変だな。」
という感情がわいていた。

その子は、母の知り合いの子どもで、小児がんをわずらっていた。がんの治り
ようをしており、使う薬の副作用で毛が抜けてしまっていた。幼かったとはいえ、
失礼な感情を抱いてしまったことに反省した。

人は、自分と違うだけで、偏見をもってしまいがちだ。あの時の私は、病気の
ことを知らず、人の心の痛みにも気づくことができなかった。

私の祖母は美容師だ。祖母から、「ヘアドネーション」のことを教えてもらっ
た。ヘアドネーションとは、髪を寄付することだった。何年も伸ばした髪をカット
し、その長い髪で、ウィッグを作る。それをがん治りようや、原因の分からない
脱毛症などで、髪を失ってしまった子どもたちに寄付する。

「私もやってみよう。」

その日から、私も髪を伸ばし始めた。自分の髪の色が、だれかの役に立てると
思うとうれしかった。

髪を伸ばすだけのこと。簡単なことだと思っていたが、道のりは長かった。ウ
ィッグを作るのに必要な人毛の長さが、切り口から毛先まで、三十一センチメー
トル以上だった。髪をカットした後の自分の髪型を考えると、はえ際から四十セ
ンチメートルくらいは伸ばす必要があった。伸ばし始めてから最初の夏、髪の色
が長いために暑く、洗髪も大変で、私は、

「もうやめた。髪を切ろう。」

と、挫折してしまった。しかし、私より数倍つらい思いをして、治りように耐え
ているあの写真の子を思い出した。

病気のこと、髪を寄付のことについて、インターネットや本で調べてみた。人
毛でつくるウィッグは、約三十人分の髪で一人分のウィッグになるそうだ。私は
挫折している場合ではないと思った。

病気は辛く苦しいこと。「脱毛」による精神的苦痛は大きく、病気と同じくら
い辛いもの。髪がないことで、周りの人からジロジロ見られたり、

「気持ち悪い。」

と、心ない言葉をかけられた方もいるという現実。また、人の目が気になり、引

きこもりになってしまった方もいた。

私たちは、無意識に自分と違うものに偏見を持ってしまう。正直、私たちの心の中から、差別や偏見をなくすことは難しいことかもしれない。些細なイジメや、小さな偏見から、テロや戦争など、世界規模の争いに至るまで大きい小さいはある。けれども、それらは、どれも他を受け入れないことから起きているのではないだろうか。

一人一人、外見も性格も能力も違う。習慣や文化も十人十色であり、みな違っている。私たちは、そのことを分かっているはずなのに、時々忘れてしまったり、目をそむけてしまったりする。悲しい現実だ。

しかし、私たち一人一人の力は小さいけれど、小さいことの積み重ねで、だれもが笑って過ごしていける社会を、世界を、つくれるはずだ。

私は三年半、髪を伸ばし続けた。去年、四十センチメートルほどまで伸びた髪を、祖母にカットしてもらった。そして、その髪を寄付した。人生初のベリーショートヘアになった。あまりの短髪に、男の子みたいで恥ずかしく、人前に出るのがすごくいやだった。

次の日登校すると、髪を伸ばしていた理由を知っていた友達が、

「すごく似合ってる。髪を寄付したんだね。」

と言ってくれた。他の友達からも、先生方からも、温かい言葉をいただいた。

私はまた、髪を伸ばしている。私はヘアドネーションのことを多くの人に知ってほしい。病気で苦しむ人たちが、少しでも前向きになり、笑って過ごせる世の中になることを強く願う。そのために、ボランティア活動などに進んで参加し、助け合いや思いやりについて考えを深めていきたい。